

第9章 太平洋問題調査会の京都会議と上海・杭州会議に参加した ニュージーランド女性：ベラ・ヘイに関する資料探しの経緯

山岡 道男

はじめに

本稿は、特別研究期間（サバティカル）中の2013年度（2013年4月～2014年3月）に、ニュージーランドのオークランド市にあるオークランド大学ニュージーランド・アジア研究所に訪問学者として滞在していた時に執筆した論考である。その内容は、ニュージーランド人の女性で、戦前期の日本や中国で開催された太平洋問題調査会の国際会議（太平洋会議）に、ニュージーランドの代表の1人として参加した人物に関する調査記録である。従って、時系列で記述されているので、調査日記となっている。

本稿においてイタリックで記されている箇所は、「1929年の京都会議と1931年の上海・杭州会議に参加したニュージーランドの女性：エイダ・ベラ・ヘイ（コッカー）の生涯」（『渋沢研究』第26号、渋沢研究会、2014年1月、3-12頁）に掲載されたものであり、同論文の中でも、本稿の出版計画を予告していた。これらのイタリック箇所は、同論文の約3分の1に相当する部分である。ぜひ、同論文も、ご一読頂ければ幸いである。また、参考資料として、オークランド博物館とオークランド大学図書館から、4つの資料を集めたが、コピーライトの件が不明なので掲載を見送った。次のオークランド訪問の際に、両機関を訪問して、手続きを取りたいと考えている。

1. 第1日目（2013年6月17日：月曜日）

6月17日の月曜日、午前10時に、オークランド市内のエプソン地区にあるディオセサン女子学校（Diocesan School for Girls）を訪問した。歳を取ったせいか、行くために覚えていた道路を1本間違っしまい、間違わなければ車を使って15分で行けるところを、40分以上をかけて到着した。この地区は、女子学校が4校と多く、迷って道を聞いたところ、別の女子高校を教えられて、そちらへ到着してしまい、その高校で、これから行くディオセサン女子学校の場所を教えてもらうという状況であった。

この学校を訪問したのは、表題にもあるように、戦前期に太平洋問題調査会（Institute of Pacific Relations）が主催した、①1929年に京都で開催された第3回目の太平洋会議と、②1931年に上海・杭州で開催された第4回目の太平洋会議に、同校の女性教師が参加したからである。同校の校長宛に、何か情報があれば教えてほしいというメールを書き送ったところ、学校の記録保管人（School Archivist）のエバン・C・ルイス（Evan C. Lewis）さんからメールで返事があり、問い合わせの教員に関して若干の情報があるので、本日（17日）

に会って話したいということで、訪問した次第である。

この女子学校は、小学校準備生から高校生（Year0からYear13）までが通える女子だけの学校で、2013年8月時点で、1390名の生徒が在学しており、教職員は211名（教員125名、職員86名）が勤務している聖公会系（Anglican）の私立学校である。設立は1904年であるので、来年の2014年は110周年記念の年に当たり、伝統校として、学校の資料を管理するルイスさんのような職種の人も働いている。

今回の調査対象者は、ベラ・ヘイ（Vera Hay）という名前の教師で、毎年発行されている『ディオセサン高校年報（Diocesan High School Chronicle）』（以下『高校年報』）の1929年から1931年までの間を探して、ベラ・ヘイの名前が掲載されている箇所をコピーしてもらって来た。

1928年の『高校年報』の中では、教職員（School Officers）の学年教師（Form Mistresses）の欄に、ヘイの名前で2名が掲載されていた。「Miss V. Hay (VL)」と「Miss M. Hay (Lits. B.)」であるが、前者が今回の調査対象者である。スタッフの消息欄（Staff Notes）では、カワウ（Kawau）の近くで事故に合って病院に入院しており、回復中であることと、彼女の担当科目である理学（science）の授業では、代講としてヘラルド先生（Miss Herald）が教えていることの2点が載せられていた。このことより、ベラ・ヘイは、理学の先生であることが分かった。

1929年の『高校年報』の中では、教職員の学年教師の欄に、「IVbp: Miss Hay」の名前が載せられており、またスタッフの消息欄には、「ベラ・ヘイ先生は、第2学期に、ニュージーランドからの参加者の1人として、日本で開催される太平洋問題調査会の会議に参加するために、学校を離れる。次年度に戻って来た際に、彼女の体験談を聞くことを楽しみにしている。ヘラルド先生が、理科でのヘイ先生の仕事を引き継ぐ」ということが載せられていた。

1930年の『高校年報』の中では、教職員の学年教師の欄に、「Miss Hay」の名前が載せられており、下記の「ヘイ先生の講義（Miss Hay's Lecture）」という独立した項目で、日本と中国での体験談を生徒に話したことが記されている。スタッフの消息欄では、ベラ・ヘイが、極東旅行から戻ったということが、簡単に書かれていた。

On May 8th, Miss Hay gave us an interesting and amusing lecture on her experience while abroad in China and Japan. She described to us many of the customs of these two countries, and led us to believe that a Chinaman's dinner is not exactly an Englishman's idea of heaven, though a royal garden party in Japan may come near his dream of fairyland.

Mannequins were readily forthcoming from the audience, and by means of these Miss Hay was able to show us some of the richly embroidered garments worn by the people in China.

1931年の『高校年報』の中では、教職員の学年教師の欄に、「Miss Hay (Terms I. & II.)」の名前が載せられており、スタッフの消息欄では、①ベラ・ヘイが、杭州で開催される太平洋問題調査会の会議に参加するために、第2学期の終わりに本校を離れたこと、②彼女が、ニュージーランドからの参加者の中で、唯一の女性であること、③彼女が戻ったならば、多くの興味ある話をしてくれることを望んでいること、④マクドナルド (McDonald) 先生とムーア (Miss Moore) 先生が代講をすることが載せられていた。

以上が、ルイスさんにコピーをしてもらった4年間の『高校年報』からの関連箇所の要約である。この他に、ルイスさんは、同校の歴史に関する書籍を2冊寄贈してくれた。1冊目は、*The First Fifty Years: A History of Diocesan High School for Girls, Auckland, 1903-1953*, (Valeria Johnson & Honor Jensen compiled, 1993) であり、2冊目は、*Follow Your Star: Diocesan School for Girls, Auckland 1903-2003* (Margaret Hammer, Board of Governors, Diocesan School for Girls, 2003) である。

2冊目の書籍は、多くの写真が使われた2003年までの学校史であり、この中には、ベラ・ヘイに関する記述はなかった。しかし、1冊目には、その最後に載せられていた過去の全教員一覧表に、「1927-31, Miss Vera Hay (Mrs. Cocker) d.」と載せられており、この書籍が出版された時には、既に死去していたこと (d.) が分かった。また、コッカーという名前の男性と結婚したことも、この教員一覧表から明らかとなった。なお、もう1人のM・ヘイ (ベラ・ヘイの姪) の方は、「1927-29 Miss M. Hay d.」となっており、この書籍の出版時には、ベラと同様に亡くなっていた。

また、ベラ・ヘイの担当クラスが最上級生の第6学年であったことから、ルイスさんによれば、大学での学位を持っていることが推測されるとのことであったが、ニュージーランドにおける大学卒業者一覧のHP (1870年から1961年) では、残念ながら彼女の名前は見当たらなかった (<http://shadowsoftime.co.nz/university11.html>)。

2. 第2日目 (2013年6月21日：金曜日)

間借りしている借家では、電気節約のために暖房が昼間は使えなく、寒くてしょうがないので、その対策として、暖房の効いている大学の研究室で仕事をするを本日から始めた。11年前に当地に滞在していた時は、研究室として個室をもらえたが、現在はスペースがないとのことで共同利用となり、いつも誰かがいるので、とても使いづらい状況である。

そこで気分転換のために、図書館へ、太平洋問題調査会の京都会議と上海・杭州会議に参加したニュージーランド女性であるベラ・ヘイのことを調べるために行った。今週の月曜日には、太平洋会議が開催された1929年と1931年当時に、彼女が教師をしていたディオセサン女子学校へ行き、彼女がエイダ・ベラ (Ada Vera) ではないかということや、また結婚してコッカーという名前に苗字が変わったことも分かった。さらに、ニュージーランド太平洋問題調査会のメンバーの中に、ウィリアム・ホルス・コッカー (William Hollis Cocker;

1896-1962) という名前の人物がいたので、この人と結婚をしたのではないかと推測した。そこで、オークランド大学の中央図書館で、ニュージーランド太平洋問題調査会のメンバーで、一時期、第2代目の事務局長をしていたガイ・ハーディ・スコラフィールド (Guy Hardy Scholefield; 1877-1963) が出版した『ニュージーランド・西太平洋の人名録 (Who's Who in New Zealand and the Western Pacific)』シリーズの第4版 (1941年出版) を見ると、この推測は的中した。同書の109頁にあるコッカーの項目に、「1934年にエイダ・ベラ (Ada Vera) と結婚」と記されていた。彼女は、1931年10月21日から11月2日にかけて中国の上海で開催された太平洋会議に、オークランド支部の事務局員 (Secretary, Auckland Branch, New Zealand Council) として参加しており、会議の終了後にはディオセサン女子学校に帰ることが期待されていたが、実際は戻っていなかった。しかし、本日の中央図書館での調査で、上海会議参加後の1934年にコッカーと結婚したことが分かった。父親の名前は、フィンレイ・M・ヘイ (Finlay M. Hay) である。

このホリス・コッカーの経歴を見ると、オークランド大学と関係が深いので、研究室で図書検索をすると、同図書館の特別コレクション (Special Collections) のある特別資料室に、彼に関する古文書があることが分かったので、夕方4時に図書館へ行った。入室の手続きをした後に、白い手袋をして資料をみると、1908-11年の日記の一部と、当時の写真アルバムが3冊あった。午後5時には特別資料室は閉室となるので、10分ほど前にこの4冊を返却するために片付けながら、図書館員のキャサリン・ポーレイ (Katherine Pawley) さんに、ベラ・ヘイについて調査していることを話すと、偶然にも、最近、大学新聞を見ていたマレーシア人の研究者と、コッカー夫人が交通事故で死去したという記事について話をしたとのことであった。そこで、特別資料室は週末の土日には開いていないので、来週の初めに、再度、彼女が亡くなった年と思われる1951年の大学新聞を調べに来ることにした。「犬も歩けば棒に当たる」とは、まさにこのことである。

ベラ・ヘイから、エイダ・ベラ・ヘイである確率が高いことは、ディオセサン女子学校のルイスさんから教えてもらっていたし、また、①生年は1895年、死亡年は1951年であり、享年55歳であったこと、②両親の名前は、母がエイダ (Ada) で、父はフィンレイ・ミルフォード・ヘイであることも突き止めてもらっていた。

3. 第3日目 (2013年6月25日：火曜日)

昨日の月曜日に、図書館へ行ってポーレイさんに会おうと思っていたが、自宅でこれから出版予定の経済教育に関する書籍の校正を始めたり、日曜日に行った大きなモールについてエッセイを書いていたりしたら、お昼過ぎになってしまい、また天気も良く、家の中も暖かかったので、この日は、大学へは行かずじまいとなってしまった。昨夜は早く寝たので、熟睡したためか、夜中の午前2時半に目が覚めてしまい、5時半まで起きていた。その後でまた寝たので、2回目に目が覚めたのは、陽が昇って明るくなった午前8時過ぎであった。

天気も良いので、午前9時過ぎに自宅を出て、大学へ向かい、研究室経由で図書館へ行った。特別資料室のポーレイさんに会って、ベラ・ヘイが死去した1951年の大学の記録帳（大学新聞）を見せてもらい、そこで1日かけて調べようと思っていたら、既に彼女の方で調べてくれており、特別資料室に着くや否や、該当箇所を教えてくれた。それは、新聞の切り抜きを大きなスクラップ・ブックに張ったもの（大学新聞）で、コピーは不許可だが、写真撮影なら許可するとのことであったので、一度研究室に戻り、カメラを持って再び特別資料室へ行って、新聞の関係箇所を撮影した。また、ベラ・ヘイの経歴に関する資料に関しては、コピーをしてもらった。さらに、オークランド博物館（Auckland War Memorial Museum）に、いくつか資料があることも既に調べてくれており、同博物館にぜひ行くようにというアドバイスをポーレイさんからもらった。

資料の中に、彼女がエイダ・ベラで、また2回の太平洋会議に参加したことが載っていたので、この事実を確認出来て、とてもうれしくなり、昼過ぎだったので、曇り空ではあったが街中へ行き、16ドルのステーキ屋定食を食べた。また夕食用に、3種類の肉（バーベキューポーク、クリスピーポーク、ダック）がご飯の上に載っている定食を、持ち帰り（テイクアウト）用として中華料理店で購入した。これは、以前も買ったことがある定食であるが、ご飯はタイ米で食べづらいので、3ドルを追加して焼き飯（チャーハン）に代えてもらい、合計で17.5ドルであった。

お腹が一杯となったので、街中から研究室に戻り、車でオークランド博物館へ向かった。この博物館は、オークランド・ドメイン（Auckland Domain）という広大な公園の敷地の中央にあり、この博物館を回り込むような道路は、通勤の際の近道としていつも車で通っている。今回の在外研究では、4月にオークランドへ到着して以来、この博物館へは初めての訪問であった。オークランドでの観光名所の1つであるこの博物館は、いつも、海外からの観光客を初めとして、ニュージーランドの小学生から高校生までであふれている。

車を博物館の周りのどこかに停めようとしたが、駐車場は満杯だったので、そこでもう1回博物館の周りを回って戻ってくると、1台分が空いており、そこに停めたが、ここは120分間だけ停車が出来る駐車区域であった。車を停めた後、博物館の入口の受付へ行き、資料のことを聞くと、2階の図書館へ行けとのことで、エレベーターで2階へ行った。ポーレイさんからもらった資料の請求番号が書いてあるメモ用紙を、今度は図書館の受付で見せると、図書館員が資料請求用紙に書き入れをしてくれ、私がサインをすると、約5分後に、他の図書館員が請求した資料を持って来てくれた。その一部に、先に大学図書館で写真撮影した新聞記事も含まれていた。資料が入っていた袋の表紙を含めて、9枚コピーをしたが、8枚はA4版で、1枚がA3版であったので、A4版で合計10枚となり、3ドルを払った。

本日集めた資料を基に、ベラ・ヘイがエイダ・ベラ・コッカーであることが明らかとなったので、これらの資料を使って、エイダ・ベラ・コッカーの生涯を、簡単に記してみたい。

4. 第4日目（2013年6月28日：金曜日）

昨夜と今日の午前中を使って、オークランド大学の中央図書館とオークランド博物館の図書館で手に入れた、エイダ・ベラ・コッカーに関する下記の4つの英文資料をタイプし直した。1番目以外は、どちらの図書館にも同じ資料があったが、2番目以外は、オークランド博物館の資料を利用した。

第1番目は、彼女が死去した後で、彼女が所属していたニュージーランド女性大学卒業者連盟の会長が、ベラについて書いた伝記である。第2番目は、同連盟が、ベラの死後に会報か何かに載せた追悼文を、改めて2000年に編纂した記録集に転載したものである。第3番目と第4番目は、1951年6月23日（日）に、コッカー夫妻が交通事故にあったことを記した『ニュージーランド・ヘラルド』の新聞記事であり、第4番目の資料は、ベラが交通事故で死去したことを報じる死亡記事となっている。この第3番目の新聞記事の欄外に、この「記事は、ミス・M・シートンにより、集められ、提供された（Collated & Presented by Miss M. Seaton）」と書かれていた。このM・シートンとは、メアリー・シートン（Mary Seaton）のことであり、ベラがニュージーランド太平洋問題調査会オークランド支部の事務局員をしている時に、メアリーは、ウェリントン支部の事務局員をしていた。彼らが若かった時には、ニュージーランド太平洋問題調査会の活動を事務局員として支えていた。京都で開催された第3回目の会議には両名が参加し、第4回目はベラが、第5回目と第6回目はメアリーが参加している。メアリーは、その後、自叙伝を執筆しているが、その現物は、現時点では手元にないので、その内容は不明である。

- ①. Biography of Mrs. W. E. Cocker : A Prominent N. Z. Woman Who Achieved A Great Deal For Young People And For University Women Graduates In Her Country
- ②. New Zealand Federation of University Women, Auckland Branch: Mrs. A. V. Cocker, M.B.S., M. Sc.
- ③. Mrs W. H. Cocker Killed: Husband Seriously Injured, Car Strikes Truck
Hamilton, Sunday
- ④. Late Mrs Cocker Will Be Missed In Many Circles

以上の資料を基に、ベラの人生を振り返ってみると、次のようになる。

ベラ・ヘイは、1895年に、父であるフィンレイ・ミルフォード・ヘイト、母のエイダの間の子供として、ニュージーランドのオークランドに生まれた。その後、オークランド・ガールズ・グラマー・スクール（Auckland Girls Grammar School）に短期間通学した後に、イギリスのチェルトナム（Cheltenham）にあるレディース高校（Ladies' College）に入学・卒業し、その後、1915年頃にロンドン大学の一部であるウェストフィールド・カレッジ（Westfield College）で、植物学で修士号を取得した。1920年代の初めに、オークランドに

戻った後は、1927年から1931年まで、ディオセサン女子学校で理科の教員を務めた。その間に、YWCA（キリスト教女子青年会：Young Women's Christian Association）との関係から、太平洋問題調査会が主催した1929年の京都会議と1931年の上海・杭州会議に、ニュージーランドからの参加者の1人として出席し、高校の教員をしながら、ニュージーランド太平洋問題調査会のオークランド支部で調査・研究活動や事務仕事を行った。1931年の上海・杭州会議に参加する際には、オークランド支部の事務局員の資格で参加した。この活動を通して、ベラは、将来の夫となるウィリアム・ホリス・コッカー（当時は、オークランド支部の会長）と知り合い、1934年に結婚したものである。夫のホリス・コッカーも、1927年にホノルルで開催された第2回目の太平洋会議に参加しており、オークランドでの太平洋問題調査会の活動が契機となって2人は結婚したのである。

ホリス・コッカーの経歴を簡単にみると、次の通りである。

彼は、1896年2月26日にニュージーランドで生まれ、父の名はジェームズ・コッカー（James Cocker）といい、牧師であった。オークランド・グラマー・スクール（Auckland Grammar School）を卒業して、カンタベリー・カレッジ（Canterbury College）に入学し、経済学と法学の学士号を取得した。また、1917年から1918年にかけて軍隊に所属した後、1919年から1921年にかけては、イギリスのケンブリッジ大学のエマニュエル・カレッジ（Emmanuel College）で学び、経済学修士と法学学士を取得すると同時に、1920年に経済学、1921年に法学の優等試験合格者（*tripos*）となった。その後、オックスフォード大学のWEA（Workers' Educational Association）のサマースクールの講師となり、1927年に、太平洋問題調査会の第2回ホノルル会議に参加し、1931年の時点では、太平洋問題調査会のオークランド支部の支部長であった。1928年から1930年はオークランドのWEAの支部長で、1931年現在は、大学チュートリアル・クラス委員会の議長で、またオーストラリア・ニュージーランド経済学会（Economic Society of Australian and New Zealand）のオークランド支部の支部長である。彼の職業は、事務弁護士（*solicitor*）となっている。

ベラとホリスの結婚時期は、上記の資料では1932年となっているが、スコラフィールドの『人名録』では、1934年となっている。これは、1934年の方が正しいことが、後に新聞記事で明らかとなった。また、死亡時期も1950年となっているが、正しくは1951年である。さらに上記資料のすべてで、太平洋問題調査会（Institute of Pacific Relations）を、Institute of Pacific Affairsとしており、また合併後の正式な組織名（New Zealand Institute of International Affairs）もInstitute of International Relationsと表記されているが、どちらも誤りである。また資料3では、1930年代の初めに、中国と日本を訪問したとあるが、日本への訪問は1929年であるので、誤記である（6. 6日目 [173 頁] に続く）。

5. 第5日目（2013年6月29日：土曜日）

スコラフィールドの『人名録』の第3版（1931年出版）の57頁には、太平洋問題調査会に関して、下記の内容が記されている。

Institute of Pacific Relations

Established 1926

General headquarters: Honolulu, Hawaii

New Zealand Branch: President, Hon. Sir James Allen, M.L.C.; vice-president, W. H. Cocker, LL.B (Ak.), J. E. Strachan, M.A., B.Sc (Rangiora), Walter Nash, M.P. (Wn.); co-opted member of National Council, W. B. Matheson (Wn.); honorary secretary, G. H. Scholefield, O.B.E., D.Sc. (Parliamentary Library, Wn); hon. treas., V. N. Beasley (P.O. Box 1462 Wn.); research sec., Prof. W. N. Benson (Otago Univ., Dn.).

Groups.—Auckland; Chairman, W. H. Cocker; hon. sec. Miss Vera Hay, M.Sc. 108 Grafton rd. Wellington: Chairman, W. Nash, M.P. : hon. sec. H. F. von Haast, M.A. LL.B. 41 Salamanca rd., Wn. Canterbury: Chairman, J. E. Strachan, M.A., B.Sc. ; hon. sec., R. G. Hampton, Richmond Hill, Sumner. Otago: Chairman, Prof. Benson; hon. sec., Dr. W. J. Mullin, 16 Maheno st., Dn

上記の人物に関して、本部の監事のV・H・ビースレイと、各支部の3名の事務局員（オークランド支部のベラ・ヘイ、ウェリントン支部のR・G・ハンプトン、ダニーデン支部のW・J・ムリン）を除いた8名の人物記事は、下記のように『人名録』に掲載されており、その記載内容をみれば、どんな人物かが分かって、とても便利である。

James Allen (76頁), W. H. Cocker (132頁), J. E. Strachan (325頁), Walter Nash (268頁), W. B. Matheson (255頁), G. H. Scholefield (307頁), W. N. Benson (97頁), H. F. von Haast (338頁)

6. 第6日目（2013年6月30日：日曜日）

『人名録』の人物伝をみると、多くの略語を用いて、少ないスペースでコンパクトにまとめて書かれている。その中には、地名や経歴と共に、日本人にはなじみのない勲章の授与の関係事項もあり、その略語を判読するのは大変である。下記は、第4版の『人名録』の109頁に載っている、夫のウィリアム・ホリス・コッカーの略歴である。

Cocker, William Hollis, solicitor (Hesketh, Richmond, Adams and Cocker), Auckland. B. N.Z., s of Rev. Jas. Cocker; m 1934 Ada Vera, d of Finlay M. Hay. Ed. Auck. Gram. Sch. Cant.

Coll.; B.A., LL.B; 1915 assoc. to Sir R. Stout; 1917–18 served with N.Z.E.F; 1917 lieut.; after Armistice senr. inst. at Sling Camp economics and law; 1919–21 Emmanuel Coll., Cambridge; 1920 Econ. Tripas; 1921 Law Tripas (1st cl. hons.); elected schol. of Emmanuel 1922; lect. at W.E.A. Summer Sch., Univ. of Oxford; 1927 deleg. to Inst. of Pacific Relations Conf., Honolulu (chm. Auck. group); 1923–30 pres. W.E.A., Auck.; chm. Univ. Tutorial Classes com.; pres. Econ. Soc. of Australia and N.Z. (Auck. Branch); 1935–36 Broadcasting Bd.; N.Z. Univ. Senate; pres. Auck. Univ. Coll. Cl.; v-pres. Auck. Dist. Law Socy. Pte ad: 124 Grafton rd, Auckland

Rev.: Reverend

Jas: James

assoc: associate

Sir R. Stout: STOUT, Sir Robert, P.C., K.C.M.G. (1844–1930). Lawyer and statesman.

N.Z.E.F: New Zealand Expeditionary Force

lieut: イギリス英語ではレフテナント, 中尉 (first lieutenant) ・ 少尉 (second lieutenant)

Armistice: (暫時的な) 休戦, 停戦, 休戦協定

Sling Camp: Sling Camp was a World War I camp occupied by New Zealand soldiers beside the then-military town of Bulford on the Salisbury Plain in Wiltshire

Univ. Tutorial Classes: University tutorial classes: a study in the development of higher education among working men and women (1913)

Econ. Soc. of Australia and N.Z.: Early Days of the Economic Society of Australia and New Zealand, Economic record; The Journal of the Economic Society of Australia and New Zealand

schol: scholar

WEA: Workers' Educational Association

Com: committee

Bd: Board

Cl: Council, National Council of Adult Education

Pte ad: Private address

(4. 4日目 [171頁] からの続き) ベラとホリスの結婚後の生活は、ホリスが、ニュージーランド大学に深く関わり、1938年から1957年までオークランド・カレッジの総長 (president) であったり、1957年から学長 (chancellor) であったりした関係で、ベラも夫の仕事を支えながら、大学での行事に参加して、スタッフを助けたり、また海外からの訪問者や新任者の世話を積極的に行ったりした。彼女自身も、先に述べた、大学を卒業した女性の

組織である、ニュージーランド女性大学卒業者連盟のオークランド支部の支部長（1930年代の8年間）として同連盟を盛り上げ、その後、5年間は本部の副会長として、また続く1946年から1948年は本部の会長にも就任した。

太平洋問題調査会の1つの功績は、ベラのように、若い女性を登用して、女性の地位の向上を目指したことが挙げられるが、その1つの典型例として、ベラの生涯が当てはまるように思われる。そのために、ベラは女性の健康、子供の世話や成長を助けるために、オークランド女子運動協会（Auckland Girls' Athletic Association）の設立に携わったり、オークランド保育園（Auckland Day Nursery）の役員であったり、オークランド保育計画センター協会（Auckland Nursery Plan Centre Association）の副理事長を務めたりした。

戦争中は、1939年から1945年にかけて、女性による戦争支援をする組織である戦争奉仕婦人団体（Women's War Service Auxiliary）のオークランド支部長として活躍し、その功績を認められて、1946年にMBE（大英帝国勲章：Member of the Order of the British Empire）を授与されている。

1951年6月23日の午後6時50分に、ベラの身に悲劇が起こり、交通事故により突然彼女は55歳でこの世を去った。その時の状況は、資料3と資料4の『ニュージーランド・ヘラルド』紙の新聞記事から読み取ることが出来る。コッカー夫妻は、夫の運転でハミルトン市の近郊のンガルアワイア（Ngaruawahia）を走っていて、そこで事故にあった。この事故現場は、オークランド市からハミルトン市に向かって南下して行く国道1号線上にあり、ハミルトン市に入る直前の場所に位置している。事故の状況は、コッカー夫妻の車が木材を積んでいるトラックに追突したはずみで、積み荷の木材が車のフロントガラスを突き破り、ベラは即死し、夫のホリスは重傷となって、救急車でワイカト病院に運ばれたとのことである。しかし、夫のホリスは、1962年12月19日に66歳で死去しているので、この事故では、生命は取り留めたようである。

彼女に対する追悼文では、彼女が物事の本質を直ちに見抜く才能を持っていたことが述べられており、同時に、他人に対する思いやりのある婦人であったことも記されている。

今回のベラ・ヘイに関する調査は、彼女の悲劇的な終焉をも（以）って終わったが、しかし、生前の彼女の活動を通じて、1929年の日本旅行と1931年の中国旅行が、彼女の人生に大きな影響を与えたであろうことが確かめられた。また、オークランド支部の太平洋問題調査会での活動を通じて、夫のホリス・コッカーに出会い、彼女のその後の人生を実り豊かにしたことも分かり、太平洋問題調査会の人物伝の調査としては、満足のいく成果を得たように思われる。

付録：ホリス・コッカーの死去の前年にあたる1961年の『人名録』での略歴

Cocker, William Hollis, CMG ('50), so'r, Hesketh & Richmond, Wyndham st, Auck. B. N.Z. 26.2.1896, s of Rev. J. Cocker; m '34 Ada Vera, d of Finlay M Hay. Ed. Auck. Gram. sch CU;

B.A., LL.B; '19-21 Emmanuel Coll, Cambridge; MA, LLB; '20 econ. tripos; '21 law tripos; '22 elected schol. of Emmanuel; served with 1 NZEF '17-18; '35-36 mem NZ Broadcasting Bd; '40-41 pres Auck dist. law socy.; '42-46 Cl of Legal Education; mem NZ Univ. Senate; '38-57 pres AU; chancellor AU since '57; chm Natl Cl of Adult Educ '48-58; mem Univ grants committee '50-53; v-pres NZ Inst of Internatl Affairs; dir NZ st Dunstons. Pte ad: 124 Grafton rd, Auckland
NZ St Dunstan's Association (Blinded Servicemen's Trust Board)

7. 第7日目（2013年7月16日：火曜日）

7月4日から14日まで、オーストラリアのキャンベラを訪問し、そこにあるオーストラリア国立大学で開催された豪州日本学会（7月8日～11日）の研究大会に参加して報告をする。と同時に、その前後には、国立図書館・国立公文書館・オーストラリア国立大学図書館において、太平洋問題調査会に関する資料調査を実施した。日本からも、片桐庸夫（群馬県立女子大学）教授、高光佳絵（千葉大学）助教、三牧聖子（早稲田大学）非常勤講師の3名が参加して、4人でIPR関係の分科会（パネル）を設置した。司会を依頼した赤見友子（オーストラリア国立大学）上級講師の都合で、報告日が学会最終日の午前中になったので、参加者も10名程度と少なかったが、同日の午後に開催された閉会式の後の懇親会では、参加者全員と話が出来たのは、とてもよかった。

ニュージーランドに戻った翌日の月曜日には、同じ週の木曜日から土曜日にかけて、オークランド大学教育学部で開催される経済教育の国際会議（International Association for Citizenship, Social and Economics Education Biennial Conference 2013：国際市民・社会・経済学教育学会）に参加するために、日本から猪瀬武則（日本体育大学）教授がオークランドへ来たので、昼に会って接待をした。同日の午前中は、ニュージーランドでは、新車登録をして6年以上の車は半年ごとに車検（WOF: Warrant of Fitness; 適合認可）を受ける必要があるために、オークランド市の北側に位置するノースショア（North Shore）へ行き、そこで日本人が経営している自動車修理工場において、約30分の時間をかけて、35ドルで私の車の車検を受けた。

本日も、午前10時に猪瀬教授をホテルへ迎えに行き、そこから学会会場の教育学部があるエプソン・キャンパスへ移動して、コーヒーを飲みソーセージドッグを食べたりした後、本部キャンパスにある私の研究室へ1人で戻って来た。その後は、猪瀬教授と午後5時にまた会って夕食を食べる約束をしていたが、HPを使った検索作業が終わらなかったため、夕食会はキャンセルとした。

午後2時に、副学長室があるビル（Alfred Nathan House）内に研究室を持っている、大学史編纂室（Records Management Programme Leader）のニコル・エリザベス（Nichol Elizabeth）さんに会い、ホリス・コッカーの経歴に関して話を聞いた。私と同じニュー

ジーランド・アジア研究所に所属しているニコラス・ターリング名誉教授 (Emeritus Professor Nicholas Tarling) もよくここを訪れるようで、話が終わってわかれる際に、ニコルさんは、幾つかの段ボール箱を指さして、現在はイギリスで冬休みを過ごしているターリング教授に頼まれている資料だと教えてくれた。また、私の所属する研究所が大学の別のビル (Owen G. Glenn Building) の6階にあることも知っていた。

今回ニコルさんから教わった検索方法は、ニュージーランドの過去の新聞記事をすべてチェック出来るもので、本日は、「vera hay (3419項目)」と「vera cocker (240項目)」の2つを検索し、約3時間をかけて、その内容を見て、関連する記事がある場合はコピーをすべて取った。「太平洋問題調査会 (institute of pacific relations)」と検索項目を入れたら、約2千件が出て来たので、明日は、これを大学の研究室で検索する予定である。検索するHPは、大学のコンピュータだけから入れるので、自宅で作業をすることは不可能である (後に、自宅からでも検索が出来ることが分かった)。

8. 第8日目～11日目 (2013年7月25日 (木)～28日 (日))

7月18日 (木) から20日 (土) にかけて、オークランド大学教育学部で開催された経済教育関係の国際会議に参加するために、日本から知り合いの友人4名が、オークランドへやって来た。そのために、彼らの世話をしなければならなかったし、また私が19日 (金) に、ワイカト大学のスティーブン・リム (Steven Lim) 上級講師と共に報告をしなければならなかったので、ベラ・ヘイに関する調査や執筆活動は中断状況にあった。

22日の月曜日には、全員が日本に戻ったが、彼らのアテンドと学会参加や報告準備で体が疲れてしまい、25日 (木) までは、印刷したベラ・ヘイ関係の新聞記事を、項目別に振り分ける作業以外は、論文の作成に向かう気力が全く起こらなかった。

しかし、7月末を締切として依頼されていた『渋沢研究』への掲載論文で、ベラ・ヘイのことを書かねばならなかったので、25日の午後から、章立てや内容の検討を始めた。26日の金曜日の午前中には、「はじめに」を書き、午後には、第1節の「生誕から1920年代までの活動」について、既にかいた内容と、先に手に入れた新聞記事を使って書き上げた。また夜には、第2節の「ディオセサン学校時代」に関して、先にかいた内容を取り込んで纏めあげた。

土曜日の27日には、第3節の「太平洋問題調査会での活動」に関して、新聞記事を京都会議関係・上海会議関係・帰国後の報告関係の3つに分けて、その内容について書いていった。第4節の「ホリス・コッカーとの出会い」は、コッカーに関して既にかいた略歴から取り出し、結婚式の内容は、新聞記事から取り入れた。また、結婚後のベラの活動も、以前にかいたものから取り出した。第5節の「ベラの死去」と「おわりに」は、これも以前にかいた内容から取り込んだ。これで夜になったので、「謝辞」欄を作成して寝たが、この2日間は、根詰めて仕事をしたので、夜になると脇が痙攣していた。

昨日の28日の日曜日は、朝の5時から注記の作成を始めて、昼過ぎには完成した。本文・謝辞・注記を1つのファイルに収めて、全文を4回ほど印刷してはそのたびに校正を行い、夕方には、いくつか不明な箇所はあるものの、一応完成した。この不明な箇所は、日本人には分からない内容なので、後日、大学史編纂室のニコルさんに問い合わせをしなければならない（ニコルさんとの確認作業は、7月31日の水曜日に行った）。

おわりに

当初はどうなるものかと思っていた論文作成ではあるが、既に行ったエッセイから、ベラに関するデータ関係の箇所を取り出し、さらに新たに習得した検索方法である、過去の新聞記事から情報を取り出す手法を駆使して、なんとか論文調に仕上がった。4月に当地に到着した時には、ベラ・ヘイがディオセサン女子学校の教員である以外の情報は全くなかったが、6月17日に同校を訪問してから、様々な幸運により、数奇なベラ・ヘイの生涯の伝記が完成した。

現在は、インターネットを通して資料の入手が出来る便利な時代となっており、本稿もインターネットなしには、このような短時間で完成しなかったであろう。しかし、足で歩いて資料を探した結果がインターネットの検索にまで結びついたのであり、足を使って資料を探す現地調査は、論文作成の過程で非常に重要なことである。